



コンサートがもっと楽しくなる…♪

オーケストラの楽器たち②～金管楽器～

平塚フィルハーモニー管弦楽団

瀬戸 淳一

昔、あるテレビ番組で、コメディアンがチューバと呼ばれる大きな金管楽器を使い、コントを演じたことがありました。記憶では、いくら息を入れてもまともな音が出ず、苦勞の果てに酸欠(?)でフラフラになってしまう……という内容だったように思います。

皆さんの中にも、「金管楽器は音を出すのが難しい」あるいは「金管楽器を吹くには、超人的な肺活量が必要」など、極端な印象を持っている方が多いように思います。このようなイメージを持ってしまうのは、金管楽器がどうやって音を出しているか分かりづらいところに原因があるようです。

そこで今回は、特に楽器を良く知らない方が誤解しやすい「音が出る仕組み」を中心に、金管楽器について説明していきましょう。



写真4

いずれにせよ、一部の例外はありますが、真鍮で本体が作られていることは楽器の種類を問わず共通しています。

さて、次は音が出る仕組みについてお話ししましょう。変なことを言うようですが、金管楽器は楽器として最も重要な機能が付いていません。実は、音が出る仕組みが付いていないのです。誤解を恐れずに言えば、金管楽器はゴムホースや水道管と同じただの「管」に過ぎません。音が出る仕組みが付いていないわけですから、楽器にいくら強い息を吹き込んでも、それだけで音が鳴ることはありません。冒頭に登場したコメディアンが扮(ふん)するチューバ奏者は、楽器の鳴らし方を知らず、息を入れるだけで音が出ると勘違いしたのでしょう。めいっばい息を入れても鳴らない訳ですから、フラフラになってしまうのも無理はありませんね。

では、金管楽器奏者たちはどのように音を鳴らしているのでしょうか。結論から言えば、息の力で唇を振動させて音を出しているのです。

楽器はマウスピース(写真5)を通じて唇の振動を拾い集め、音色を整え、音を拡大する役割を果たします。つまり、金管楽器とは、唇が発する雑音のような音を、音楽で使える立派な音に変換する道具と言い換えることができます。



写真5

まとめると、金管楽器から音が鳴るまでには①息を吐く②息を唇にぶつける③唇が振動する④唇の振動が楽器に伝わる⑤音が出る——といった過程を踏むこととなります。

これで今回のお話は終わりですが、肝心の説明がないと思う方がいるかも知れませんね。それぞれの楽器がどんな音色を出すかということです。しかし、こればかりは文章で説明ができません。是非、皆さんがコンサート会場に足を運び、耳で聞いて確かめてみてください。特に、金管楽器が全員で大きい音を吹く大曲のクライマックスは圧倒的な迫力で、手に汗握る興奮を感じることは間違いありません。でも、その音も元をたどれば、唇が振動しているだけのものです。なんだか不思議な気分になりませんか？



写真1 平塚フィル金管楽器奏者の皆さん

まず、オーケストラで使われる金管楽器は、主に4種類あります。写真1を見てください。女性が持っているのがトランペット。その隣がホルンで、以下、トロンボーン、チューバと続きます。トランペットは最高音を担当し、輝かしいファンファーレが印象的です。ホルンはトランペットより少し低い音を担当しますが、やわらかく美しい音色が持ち味です。トロンボーンはスライドと呼ばれる管を伸び縮みさせることで音程を変化させるのが大きな特徴(写真2、3)。ホルンよりやや低い音を担当します。



写真2



写真3

チューバはその大きさから分かる通り、金管楽器で一番低い音を担当する楽器です。

これらの楽器は、いずれも真鍮(しんちゅう、銅と亜鉛の合金)で作られています。金色の金管楽器は金メッキと勘違いされることもありますが、実は磨いた真鍮に透明ラッカーを薄く塗ったものです。ラッカーをかけない場合もありますが、表面がすぐにさびてしまいます(写真4)。

また、写真1のトランペットとチューバは銀色ですが、この楽器は真鍮の表面を銀メッキで処理したものです。